

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

ルカが伝えた「良い知らせ」

——ルカ伝福音書 訳述——

川上直哉

多くの人々が、すでに整理して物語っております通り、あの出来事は、確かに私たちの
間で起こったのです。それを語ろうとするものの中には、褒められたものばかりでもあり
ませんでした。それで、テオフィロ（神を敬愛する人）閣下、ここに私が一筆啓上申し上げ
ました。つまり、最初から全てを目撃した人々・この出来事を伝える御言葉の奉仕者が、
私たちにきちんと伝えてくれた事柄があるのです。それで私は、そのことを、最初から・
全て・詳しく・順序よく知っておりますので、その通りお伝えしたほうがよろしかろうと
考え、閣下にこの手紙を認（した）め、ご高覧に与（あずか）ろうと願ったことでした。
そのようにして、閣下が学んでくださいました事柄について、一層、確かに知っていただ
けますようにと、その様に願っております次第です。

ヘロデがユダヤの王であった時代のお話です。一人の祭司がいました。名前をザカリア
といました。アビヤの組の祭司でした。アロンの家系、つまり、祭司の一族の女性を妻
にしていました。その妻の名は、エリサベツといました。夫婦ともに「神の前に正しい
人」でした。「主」と呼ばれる聖書の神様の掟と法を守って、責められるところのない夫婦
でした。エリサベツは「石女」と呼ばれていました。これで「うまづめ」と読みます。「石
のように固い女＝産めない女」という意味なのです。そんなわけで、二人には子どもが
ありませんでした。「祭司の一族」の家系を守ることができない。そんな日々を積み重ねて、

二人はもう、ずいぶん年を取ってしまっていました。

日本の天皇と同じく、国家鎮守のために、祭司には「お勤め」があります。ユダヤの国でも、それは同じでした。ただ、日本の天皇は、少なくとも明治以来、「一人の人」にその役を担わせていますが、このころのユダヤでは、それは輪番となっていました。「祭司の家系」の者たち共同で、その大役を担ったのです。その「お勤め」の番が、ザカリアに回ってきたときのことです。ひとり、神殿の一番奥に入り、神様の前に出て、祭司の香を炊く係が、くじで決められる。それが「お勤め」を担当する祭司たちの習わしでした。この時、そのくじはザカリアを指名しました。ザカリアは神殿の一番奥に、一人で入っていました。ザカリアが一人で「香を炊く儀式」を行っている間、神殿にいた大勢の人々は皆、神殿の中の外側の部分に集まって祈っていました。その時、一人の天使が、聖書の神「主」から遣わされ、ザカリアの前に現れたのです。ザカリアが香を炊いていた祭壇の右に、天使は立ちました。大事な儀式を行っていたザカリアは、びっくりしながら、天使を見つめます。その心は恐れで満たされていました。

天使はザカリアに言いました。

「恐れるな。ザカリアよ。

あなたの祈りが聞かれたのだから。

あなたの妻 エリサベツは身ごもり

あなたのために、息子を生むぞ。

その息子には ヨハネと名付けよ。

その子はあなたにとっての喜びの源

あなたは歓喜に満たされる。

多くの人が その誕生を 喜び祝う ことになる。

聖書の神「主」の御前において

彼は大きなものとなる。

ワインと無縁の生活を送り、

シケラ（当時のお酒）は彼の口に入らない。

アルコールが人を満たす そのように

聖なる霊が 彼を満たす。

母の胎にいた その時から

実に彼は 聖なる霊に 満たされていた。

イスラエルの息子の 多くの者を 彼は連れて帰ってくる。
離れて久しい 聖書の神「主」の すぐそばへ。
彼らの神の御許（みもと）へと。

旧約聖書に描かれた あの英雄エリヤを 思い出してみよ。
あのエリヤを満たした霊が、
あなたの息子に注がれて
エリヤと同じ 力が満ちる。
そうしてあなたの息子は先立って
“あの方”の先触れとなるだろう。

預言者マラキが語った通り
あなたの息子は先触れとなり
「父たちの心を子たちに向けさせる」。
聞き分けのない人々が 正しい人の智慧に聞くよう 思いを変える。

そのようにして あなたの息子は
聖書の神「主」のために 人々を整え 備えをさせる。」

ザカリアは天使に言いました。「どうして、私にこんなことが理解できるでしょう。私は何とも、年を取りすぎたのです。私の妻もまた、もう、ずいぶん年齢が進んでしまいました。」
すると天使は答えて彼に言いました。

「我こそはガブリエル。
神の前に立つ者だ。
あなたに語る 言葉を携えやってきた。
喜び溢れるこの言葉 まさしくこれこそ福音を
まさにあなたに 届けに来たのだ。

見よ、あなたは押し黙る。
あなたは口が 利けなくなるのだ。
この素晴らしい出来事が 確かに起こる その日まで。

喜び溢れるこの福音に あなたは納得しなかった。
私の言葉を信じなかった。
私の言葉はそのうちに 時が満ちたその時に
確かに実現するだろう。その時が満ちる、それまでは、
見よ、あなたは押し黙る。」

神殿の中の外側の部分で祈っていた人々は、ザカリアがいつまでも中心部から出てこない
ので、「何があったのか」と心配しました。ザカリアは出てきましたが、待っていた人々に
何も語ることはできません。人々は「神殿の奥で、何か幻を見たのだ」と理解しました。
ザカリアは身振り手振りで何かを伝えるばかりで、口ではまったく何も語ることができず、
押し黙っていたのでした。

そして、ザカリアの「お勤め」の日々は終わりました。ザカリアは家へ戻りました。

それからしばらくして後、ザカリアの妻であるエリサベツは身ごもりました。五か月の
間、人前から離れたエリサベツは、こう歌いました。

「この私（わたくし）に 聖書の神は
この日々の間 ずっと変わらず
御目を注いでくださいました。
人々の間に 色濃くあった
私の恥を 取り去られたのです。」

そして妊娠 6 か月目の時のことです。天使ガブリエルは、神に遣わされ、ガリラヤにある
都市にやってきました。その都市の名はナザレといいました（皆さんの中には、ナザレは
都市ではない、と、ご異論をお持ちの方も、おられましょう。でも、とにかく、私はそう
聞いたのです。冒頭に「最初から・全て・詳しく・順序よく知っております」と申し上げ
た私としては、聞いたまま、そう申し上げる次第です）。ヨセフという結婚前のある女性の
所に、ガブリエルはやってきました。この女性は婚約中で、相手はヨセフといい、「ダビデ
の家系」の人でした。名家の生まれですが、今は没落して、家名だけを誇る一族でした。
その名家のヨセフと婚約していた女性の名前はマリアムと言いました（皆さんは「マリア」と
いう名前でお覚えかもしれませんが、私はきちんとギリシア語で記します。マリアム、でございます）。

ガブリエルは彼女の所に入り込みました（皆様、どうぞ、ギリシアの由緒ある神話の情
景を、ここで豊かに思い起こしてくださいませ）。そしてガブリエルは歌います。

「幸いあれ！恵みを受けた方。

聖書の神『主』は あなたと共におられます。」

この挨拶にびっくりしたマリウムは、これはいったいどうしたことかと、思いをめぐらしました。天使はマリウムに言いました。

「恐れるな。マリウム。

あなたは神の 恵みを受けた。

神の御許（みもと）に あった み恵みを。

見よ、あなたは身ごもる。

そして息子を生み落とす。

その息子には イエスと名前を付けなさい

その息子こそ 偉大な人に 育ち行く。

至高の方の 息子と呼ばれる。

聖書の神『主』は この息子のために

『ダビデの玉座』を用意する。

その父祖の 玉座を彼は 手に入れる。

父祖の土地・ヤコブの土地を

代々に続らす（しらす）は 彼である。

その統治はとこしえに 決して終わることはない！」



マリウムは天使に言いました。

「それはいったい、どのように、

私の身の上（え）に 起こりましょう。

私はいまだ 男の人を 知らないのです。



天使は答えて言いました。

「聖なる霊が あなたに臨む。
至高の力が あなたを包む。
それゆえにまた
生れ出（で）る子も 聖なる存在。
神の子どもと 呼ばれるだろう。」

実に見よ
あなたの親戚エリサベツを。
彼女も同じく 子を宿した。
年は取っていたのだけれど
今は六月（むつき）の身重の身。
その身は確かに 『石女（うまずめ）』と
皆に呼ばれて 苦しんでいたのに。

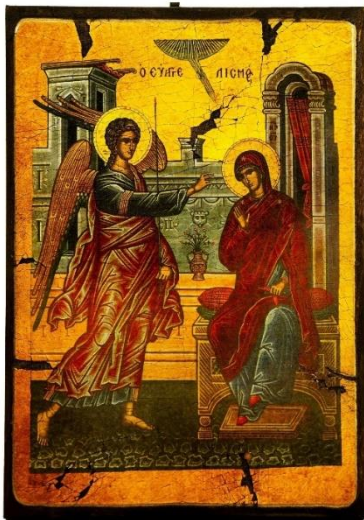


神にできないことはない。」

マリアムは言いました。

「御覧なさい、
ここにいるのは
聖書の神・主の婢（はしため）です。
あなたが語った事柄が
この身の上に 確かにそのまま なりますように」

すると、天使は彼女を離れて行きました。



天使の言葉を遮（さえぎ）って、ザカリアは言葉を失いました。天使の言葉を受け取って、マリアムも危険になりました。この当時、未婚の女性の妊娠は、「不義密通」あるいは「不倫」と呼ばれ、場合によっては死刑となります。まして、マリアムは「名家」に嫁ぐ身です。名前だけを頼りに生きる一族は、その名前の汚れを恐れます。誰かに匿（かくま）ってもらわなければ。名誉殺人の危機が迫るのです。

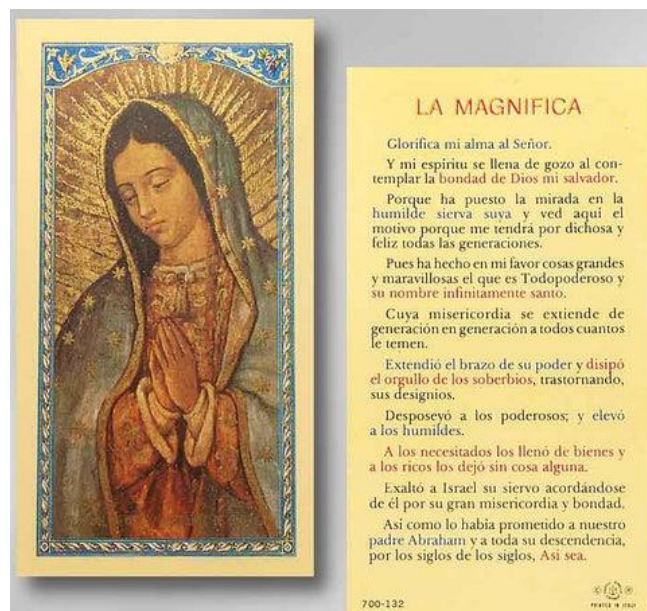
数日のうちに、自分の体の変化に気づいたマリアムは、急いで旅立ちました。おなかの子どもを守らなければなりません。低地にあるガリラヤの都市ナザレを出て、高地にある「ユダの町」へと進みます。そこには首都エルサレムがあり、そこには親戚エリサベツがいます。彼女だったら、守ってくれるかもしれない。

つわりの苦しみをこらえつつ、とにかくエリサベツの住む家・ザカリアの家へ、マリアムはたどり着きました。「祭司の家」です。この時代、世界中どこでも、祭司は最高権力者の一角に位置づけられています。その家に、厄介（やっかい）ごとが、持ち込まれました。頼りはひとつ。妊娠六か月の、身重のエリサベツです。彼女が理解してくれるなら、ようやく何か、可能性が拓けます。「恐れるな」との天使の言葉が、マリアムの胸に響きます。彼女はエリサベツに挨拶をしました。

その挨拶の言葉がエリサベツに届いたとき、です。なんと、エリサベツの胎の子が、おなかの中で飛び跳ねました。そしてエリサベツは霊に満たされて、大きな声で言いました。

「祝された人。すべての女性は あなたをうらやむ。
その祝福は あなたの胎の実に及ぶ。
こんなにも 素晴らしいことが どうして起こるか。
私の神・主の母上が 私の許（もと）に お越しになった。
御覧なさい。
あなたの声を 聞いたとき
私の耳に 挨拶が響き
私の胎で 赤子が躍った。

祝福された あなたは確かに
聖書の神・主の御声を聞いて
それがそのまま 実現すると
そう信じて旅立ち ここまで来られた。
そうした人こそ 祝された方！」



するとマリウムはこう言いました。

「私の魂は
聖書の神・主の力を知って
その偉大なことを
大きな声で語ります。
私の霊は 私を救う神様に触れ
喜び踊り はしゃぎます。
確かに聖書の神・主は私を顧みて
この婢（はしため）の
低みにまでも 届かれました。

御覧なさい。
今より後、代々にわたって 皆が私を祝します。
力ある方 その大いなること そのことが
確かに私に示されました。
その方は「聖なる方」と 呼ばれている。
その方は 憐み深い お方です。
その憐みは代々にわたって
その方を恐れる人に及びます。

聖書の神・主は
その御手で その御力を 示される。
心の思いに高ぶるものは
聖書の神・主の御手によって散らされる。
権力者たちは
その玉座から引きずり降ろされ
低く卑屈に生きる人々を
主は引き上げて下さるのです。
飢えて苦しむ人々を
主は良いもので満腹させて
富んでケチな人々を
手ぶらのままで追い払われます。

主はその僕（しもべ）イスラエルを助けてくださり
その憐れみを 思い起してくださいました。
私たちの父祖が聞いた その通り
アブラハムとその子孫に、とこしえに
その憐みは 及ぶのです。

マリウムは三か月、エリサベツの所に留まりました。つまり、エリサベツは、月が満ちる直前まで、マリウムを自分の手で匿（かくま）ったのでした。そして身重のマリウムは、無事に家に帰ったのでした。



エリサベツは臨月を迎え、男の子を生みました。「神様が大きな憐れみをお示しになった」と噂をしあいながら、近所の人々・親戚の人々が集まりました。みな、とても嬉しそうでした。そうして 8 日が過ぎました。男の子に割礼を施す日がやってきました。このころまでに人々は、その父の名前をとって、その子を「ザカリア」と呼んでいました。しかし、その子の母親はその度に「いいえ、この子はヨハネです」と言っていました。「でも、そんな名前の方は、親戚中を見回しても、いませんよ」と人々は言うのですが、ききません。それで、人々は父親の方を見ました。「どんな名前にするのですか」と聞きながら、一枚の板を取って、口のきけない父親に渡したのです。ザカリアは板を取り、「この子の名前はヨハネ」と記しました。人々は驚きました。その時、ザカリアの口が開きました。ザカリアは神さまを賛美して歌を歌ったのです。側にいた人々はみな、おそれを覚えました。この

お話は、ユダヤの全域で、広く噂になって語られたことでした。この噂を聞いた人々は、みな、心の内にこう言いました。「この子は、いったい、どんな人になるのだろう。神様の御手がこの子に添えられているのだから。」

この子の父であるザカリアは聖なる霊に満たされて神さまの言葉をその身に預かり、このように歌いました。

祝福あれ！

「主」と呼ばれる方 聖書の神

イスラエルの神に 祝福あれ。

神はその民に目を止めて

捕らわれの民を買い戻した。

その救いは立ち上がり 角のように立ち上がり

神の僕（しもべ）のダビデの家に 立ち上がっている。

いにしえ 神は 預言者により まさしくそれを 語られた。

敵の手を 憎しみ迫る全ての敵を 遠ざけて

救ってくださる約束の 預言の言葉は 成就した。

われらの父祖は 恵みを受けた。

神の尊い契約は 神によって今 実現された。

いにしえ 神は アブラハムを呼び出し

われらの父とし 約束を立てた。

恐れる事は なくなって

敵の手からも 救出されて

神のみ前にまっすぐに 聖（きよ）い道をどこまでも

この人生の ある限り 歩み行けるようにされ――

さあ今や 我が子よ汝は

「いと高き方の預言者」

と呼ばれるだろう。

汝はそのまま 御前に進み

その道を整えるのだ。

民に賜る救いの知らせを 携え分かち与えなさい。

その罪のすべて ゆるされたことを 伝えなさい。

われらの神の 憐みの内に
天のいと高き所に あけぼのが昇る。
そのあけぼのの日は 私たちにまで届く。
暗闇と死の影に坐する者 みなともに その日を仰ぐ。
私たちの足は そのようにして
平和の道に 誘（いざな）われるのだ。

そうしてこの子は成長し、霊において強い者となりました。イスラエルのためにその身を現わすその日まで、荒地の中で暮らしていました。

そうした出来事が起こっている間に、一つの「ドグマ」が皇帝アウグスト陛下から出されました。「皇帝陛下のご命令」が出されたのです。「全世界の住民を登録せよ」というご命令でした。

ご承知の通り、このころ、マリウムやエリサベツが住んでいる地域は「ユダヤ」という一つの王国でした。独自の文化を持ち、長い歴史を保ってきました。しかし、時代は「グレコローマン」と呼ばれる、ギリシアとローマの時代です。350 年ほど昔にあのアレクサンダー大王が地中海の東半分からヒマラヤ山脈のふもとまでを征服し、すべてを「ギリシア」にしました。その大帝国はほどなく分裂しましたが、世界はすべて「ギリシア」となった。そうして、この物語もギリシア語で書いております。しかしそこに、偉大なるローマ帝国がイタリア半島に起こり、地中海の西半分を征服しました。こうして「ギリシア世界」と「ローマ世界」が向き合い拮抗している今の世界になっております。

「ギリシア世界」に向き合う最前線の場所に、この物語の舞台である「ユダヤ王国」がありました。それは「シリア」と呼ばれる南北に広い地域の中央にあり、偉大なるローマ帝国におきましては重要な拠点となりました。この「ユダヤ王国」の王は、その地の利を巧みに生かし、歴代のローマ皇帝に上手に直訴し、属州の中の半独立国としての地位を保っていました。しかし、大帝国ローマとしては「ギリシア世界」を打倒しなければなりません。そのためには、戦費が要る。この物語の頃から、ローマ帝国の全ての地域で、新しい増税が始まっていました。「人頭税」でございます。

人は、不思議な力によってこの世に生まれ、この世を去ります。私たちは力を尽くしますが、人の生き死には、どうにもなりません。人のいのちは、神様のものです。でも、「生きていられるのは誰のおかげか」と、皇帝陛下は私たちに迫ったのです。「ローマが滅びれば、お前たちも生きていないのだ。今日を生きていられるのは、ローマのおかげ。だから、

今日生きていることに感謝して、一人ずつ、生きていられることのコストを支払え」と。
「人頭税」というのは、つまり、そういう事でございます。

なるほど、そういう考え方も、皇帝陛下のものらしく、あるのでしょうか。しかし、ユダヤ王国の人々は、そうした考え方に反発しました。ローマ皇帝とユダヤの人々の間に立つユダヤ王は、苦勞しました。実際には、しかし、あの有名なキリニウス閣下がシリア属州全体の長官でいらっしゃいましたから、方向は間違いなく定まっています。地方の一小国に、抵抗のしようもございません。ともかく、人の数を正確に数えて、一人ひとり、保証人を押さえ、税金を支払わせる。その試行錯誤が、権力の強烈な圧力の下、緊張感をもってユダヤ王国でも始まったのでした。

具体的には、「全員、自分の実家へ戻り、どこに住んでいる誰であることを登録する」という方法がとられました。こうすれば、一つひとつの「本家」に人数確認の責任を負わせられます。長官であるキリニウス閣下のご手配、さすがでございました。

さて、ザカリアの家のエリサベツに匿（かくま）われていたマリウムは、9 か月目になっていました。やはり、祭司の家で出産をすることは難しかったようです。出産は「血」に触れますから、あちこち穢（けが）れます。3か月も匿ってもらい、もう大丈夫だと思ったのでしょうか。エリサベツも出産をしたばかりで、身動きが取れないなかでした。これ以上厄介をかけられないと、マリウムはザカリアの家を出て、ナザレに戻りました。そして、「住民登録のドグマ（皇帝陛下のご命令）」が発せられたのです。ヨセフとマリウムにとっては、最悪のタイミングでした。

何しろ、ヨセフは「ダビデの名家」の跡継ぎの一人なのです。その婚約者のおなかに、子どもがいる。それはつまり「ヨセフの子どもではない」という事になります。それで、マリウムは命の危険を感じ、ザカリアの家のエリサベツを頼ったのでした。ヨセフは良い男で、そんなマリウムをそのまま妻に迎え、生まれる子ども（マリウムは「聖霊によって授かった」と言いききません）を自分の子どもとして育てるつもりでした。エリサベツとザカリアの援助もあり、住み慣れたナザレであれば、無事に静かに子どもを産むことができたはずでした。でも「実家に帰らなければならない」。これは、たいへんな事態です。

帰らなければ、実家に大きな迷惑が及びます。しかし、帰ればマリウムは危険にさらされる。「家の名誉」のためには女性と胎児を殺す、という事は、いつの時代もどの地域でも、しばしば起こることなのです。まして、没落してしまっている「名家」です。「家名」がすべて、と思っている人も、たくさんいる。実家は、二人にとって、とても危険な場所だったのでした。

それでも、仕方がありません。二人はナザレを旅立ちました。目指すは、ヨセフの実家がある「ダビデの町・ベツレヘム」でした。実家があり、幼馴染（おさななじみ）がたくさん住んでいる町。そして、住民登録のために、分家筋も含めて、大勢の親戚が集まってきているタイミングです。そして、マリウムは、そろそろ臨月でした。それでも、とにかく、二人分の住民登録は済ませなければならない。間の悪いことは、続くものです。旅の疲れもあったのでしょう。予想よりも少し早く、マリウムに陣痛が来てしまいました。ちょうど、ベツレヘムに到着したタイミングでした。婚約者のヨセフは、懐かしい故郷で、たいそう慌（あわ）てました。それでも、無事に、マリウムは男の子を生み落としました。すごいことです。人の生き死には、やはり、「家名」尊重のために邪魔だと思われようとも、そして、たとえ皇帝陛下に邪魔されようとも——ご無礼をおゆるしてください！—— 実に、神様の手の中にある事柄なのです。マリウムは産着（うぶぎ）に赤ちゃんを包み、そして寝かせました。寝かせた場所は、「家畜の餌箱」でした。人目をはばかり二人には、泊まる宿がなかったのです。

「家畜の餌箱」は、家畜小屋にあります。家畜は、恐ろしい伝染病のもとです。従いまして、家畜小屋には、最小限の数の家畜だけ、留めておきます。そして、その家畜小屋は、町の外側に建てるものです。その家畜小屋に、臨月のマリウムを連れて、ヨセフは逃げ込んだのでした。町と外の境目に建てられた家畜小屋。そして、その背後には、広大な野原があり、そしてその野原には、羊を預かる羊飼いたちが野宿をしていました。羊を見張る、見張りの仕事をしていたのです。

そこに、聖書の神・主の御使いが現れました。「聖書の神・主」の本名は「ヤハウエ＝あらしむるもの」です。世の中の冷たい風・権力の恐ろしい圧迫。それらをまったく寄せ付けず、いのちを有らしめ、そして、いのちを召し上げる。そんな力が、あるのです。その力そのもののことを「ヤハウエ」といい、その通り名を「アドナイ（主）」と、この地域の人は言っていました。その「主」の御使いは、茫漠（ぼうばく）と広がる野原に現れました。夜も町に入ることが許されない羊飼いたちに、「主」の御使いは、現れたのです。

そこには羊がいました。たくさんの羊がいました。しかし、その羊は羊飼いたちのものではありません。王宮や町の中心地に住むお金持ちの財産です。この夜、その羊たちの持ち主は、それぞれの町や都市の中の、温かく安全な部屋の中でくつろいでいました。自分たちの財産ですが、自分たちで守る必要もない。お金をかけて、羊飼いたちに管理させておく。羊飼いの人数が足りないと困るので、一度羊飼いとなった人間は、もう、羊飼いで以外の仕事はできないようにしておく。動物は、伝染病のもとです。動物に触れた人間は「穢れている」という事です。ですから、しょうがないのです。羊飼いは、一生、羊飼

となって、町にも入れず、一生、野宿して暮らす。その子どもたちも、そうやって生き、死んでゆく。もっとも、子どもが生まれたら、特別の手続きをして、特別の許可を取って、町の中に入り、神殿に行って、神様におささげものをしなければなりません。そうしないと、神殿も困ります。神殿だって、経営しなければならないのです。その神殿が、とくとくと教えるのです。「この子は、穢れた家の子どもだ。神様の命令だ。これからも、町に入ることなく、穢れた人間として、分をわきまえて生きよ。」――これで、完成です。羊飼いは、ずっと、人間として扱われずに、生きて死んでゆく。そうして、お金持ちたちの財産は安く管理され、そして、そこから出てくる利益のおこぼれを、また、神殿が頂く。神殿だって、経営があるのです。神様の御宮（おみや）です。立派に経営しなければ。

でも、この時、異常なことが起こりました。そうして立派に運営している神殿ではなく、その神殿を中心に設計されている町の中でもなく、その町の外側のはるかかなた、野原の真ん中に、神様の御使いが現れたのです。羊飼いたちの周りには、神様の輝きに包まれました。羊飼いたちは、もう、びっくりしてしまいました。恐れを覚え、恐ろしくなったのです。そんな羊飼いたちに、聖書の神・主の御使いは、やさしくこう言いました。

「まったく、ぜんぜん、
怖がらないでもよいのです。
その理由を、さあよく聞いてごらんなさい。
私が来たのは ただ一つ
闇に沈む あなたたち
一人ひとりを救いだす
素敵な知らせを伝えるためです。
お伝えするのは 巨大な喜び。
すべての人々が
ひとりも残らずあまされず
全員 しっかり 喜ぶお知らせ。
全員しっかり喜ぶためには
まずは誰より あなたたち。
あなたを雇った人々に
使い捨てられている あなたたち。
捨てられたことすら忘れられ
広い野原に生きて死ぬ。
そんなあなたに神様は



この喜びを まず伝えよと
そう私（わたくし）に 下知されました。
そうして初めて なるほど確かに
この喜びが 全ての人の喜びであると
はっきりしかり 示されるわけです。
だから、どうぞ、あなたたち、
恐れることは、ないのです。

今日、ダビデの町で
あなたたちを救い出す方が
お生まれになった。
その方こそが、キリストです。
あなたたちはその方を
布にくるまり餌箱に
寝ている姿で見つけるでしょう。



このことこそが、徴（しるし）になります。
全ての人の喜びが 確かにやって 来たことの
はっきりとした徴（しるし）となります。

すると突然、天の大軍勢が現れ、この聖書の神・主の御使いと共に、神を賛美して歌いました。

天の頂き 一番高い場所いっばいに
神様の輝きがありますように。

（そうすれば、どんなに深く暗い谷間にいる人にも、その光が届きます！）

地べたに平和が行き渡り
すべての人に平安が
確かにしっかり満ちますように。
すべての人の 一人ひとりが 神さまの
喜びそのもの なのだから。

そのうち天の軍勢は、御使いと共に、天に戻って行きました。そうしてやっと、羊飼いは互いにこう言いました。「これは、ベツレヘムまで行かなければ。聖書の神・主が告げられたのだ。どうなっているのか、見に行こう。」とにかく急いでベツレヘムへ。町の中には入れません。でも、とにかく行ってみることにしました。すると、町の中に入る手前、家畜小屋がありまして、そこに赤ちゃんの声が聞こえる。これは、と思って中を覗くと、マリウムとヨセフ、そして赤ちゃんが中にいる。赤ちゃんは、確かに餌箱に寝かされていたのでした。

それを見た羊飼いたちは、自分たちに御使いが語ったこの子どものことを、あちこちへ行って語るようになりました。この話を羊飼いたちから聞いた人々（つまり「穢れた」彼ら・彼女らと日頃から付き合っている貧しい仲間たち）は、たいそう驚いたことでした。ただ、マリウムだけは、ただひとり、こうした出来事を心に留めて、その一つひとつを反芻（はんすう）し、その思い出の中に身を沈めるようにしていました。

ともかくこの時、羊飼いたちは、天の軍勢と主の御使いがそうしたように、今度は自分たちの口で、神様を称える歌を歌いながら、帰りました。すべて、自分たちが見た事柄が、聞いた通りのことだったからです。

